大齋期の水曜日早課(抄)

注意 譜面中、五線譜上に IOII とある部分は、その音程を保ちながら、その部分の歌詞(祈祷文)が 持つ言葉の自然なリズムに則つて歌うことを意味しています。ただ早く歌つてしまつたり、棒読み になつてしまつたりしないよう、氣をつけてください。この聖歌譜はそのために、歌詞の意味をと ることが容易になるよう漢字を多く用いて作成しています。

【 早課 (晩堂課から続く場合、4ページの【 六段聖詠 】から)

われら かみ つね あが ほ いま いっ よよ 司祭) **我等の神は恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に。**



われら かみ こうえい なんぢ き こうえい なんぢ き 誦經) **我等の神よ、光 榮は 爾 に歸す、光 榮は 爾 に歸す**。

てん おう なぐさ もの しんじつ しん あ 天の王、慰 むる者よ、眞 實の神、在らざる 所 なき者、滿たざる 所 なき者よ、萬 善の寶 蔵 なる者、生 命を賜うの主よ、來りて我等の中に居り、我等を 諸 の 穢 よりいさぎょ くせよ、至善者よ、我等の 靈 を救い給え。

せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ 聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常 生の者よ、我等を 憐めよ。

せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ 聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常 生の者よ、我等を 憐めよ。

せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ 聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常 生の者よ、我等を 憐めよ。

こうえい ちち こ せいしん き いま いっ よよ 光 榮 は 父 と子と 聖 神 に歸す、今 も何時も世世に。アミン。

Ltvi さんしゃ われら あわれ しゅ われら つみ いさぎょ しゅさい われら あやまち ゆる 至聖三者よ、我等を 憐 め。主よ、我等の罪を 潔 くせよ。主 宰よ、我等の 愆 を赦せ。 せい もの のぞ われら やまい いや たま ことごと なんぢ な よせ。 聖なる者よ、臨みて我等の 病 を癒し給え。 悉 く 爾 の名に因る。

しゅ あわれ しゅ あわれ しゅ あわれ 主、 憐 めよ。主、 憐 めよ。主、 憐 めよ。

こうえい ちち こ せいしん き いま いっ よよ 光 榮 は父と子と聖 神に歸す、今も何時も世世に。アミン。

てん いま われら ちち ねが なんぢ な せい まんじ くに きた なんぢ むね てん 天に在す我等の父よ、願わくは爾の名は聖とせられ、爾の國は來り、爾の旨は天 おこな だま おこな たま おこな たま おこな たま おこな たま おこな たま おれら おいめに 行わるるが如く、地にも 行われん。我が日用の糧を今日我等に與え給え。我等に 債

もの われらゆる ごと われら おいめ ゆる たま われら いざない みちび なおわれら ある者を我等免すが如く、我等の 債 を免し給え。我等を 誘 に 導 かず、猶 我等を さょうあく たま とり 救い給え。

けだしくに けんのう こうえい なんぢちち こ せいしん き いま いっ よよ 司祭) 蓋 國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。



しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ 誦經) **主 憐 めよ、主 憐 めよ、主 憐 めよ、**

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ 光は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。アミン。

^{きた われら おう かみ こうはい} **來れ、我等の王・神に叩 拜せん、**

きた われら おう かみ こうはいふふく **來れ、ハリストス・我等の王・神に叩 拜俯伏せん、**

きた われら おう かみ まえ こうはいふふく **來れ、ハリストス・我 等の 王 と 神 の 前 に 叩 拜 俯 伏 せん、**

【 第19聖詠 】

【 第20聖詠 】

しゅ おう なんぢ ちから たのし なんぢ すくい よろこ きわま そのこころ のぞ ところ 主 よ、王は 爾 の 力 を 樂 み、爾 の 救 を 歡 ぶこと 極 りなし。其 心 に望む 所 なんぢこれ あた そのくち もと ところ なんぢこれ いな けだしなんぢ じんじ しゅくふくは、爾 之を與え、其 口に求むる 所 は、爾 之を辭まざりき。蓋 爾 は仁慈の祝 福

こうえい ちち こ せいしん き いま いっ よよ 光 榮は父と子と聖 神に歸す、今も何時も世世に、アミン。

しゅ なんぢ たみ すく なんぢ しぎょう ふく くだ なんぢ じゅうじか なんぢ すまい まも 主よ、爾 の民を救い、爾 の嗣 業に福を降せ、爾 の十字架にて 爾 の住所を護りたま 給え。

こうえい ちち こ せいしん き 光 榮は父と子と聖神に歸す、

t おま はんじて十字架に擧げられしハリストス神よ、 爾 が同 名の 新 なる住所に 爾 の 惠 た たま たま なんぢ ちから もつ これ たのしまてき か たま これなんぢ かっい を垂れ給え、 爾 の 力 を以て此を 樂 ませ、其 諸 敵に勝たしめ給え、此 爾 が和平の 武器、勝たれぬ勝を以て其 助 とすればなり。

いま いっ よよ 今 も何時も世世に、アミン。

重聯禱 】

カみ なんぢ おおい あわれみ よ われら あわれ なんぢ いの き い あわれ 司祭) 神よ、爾の大なる 憐 に因りて我等を 憐 めよ、爾 に禱る、聆き納れて 憐 めよ、



またわ くに てんのうおよ くに つかさど もの ため いの 司祭) **又吾が國の天皇及び國を 司 る者の爲に禱る、**



またきょうかい つかさど そんき われら ぜんにつぼん ふしゅきょう そんき われら せんだい 司祭) 又 教 會 を 司 る尊貴なる 我 等の全 日 本 の 府 主 教 ダニイル、尊貴なる 我 等の 仙 台 だいしゅきょう ため いの の 大 主 教 セラフィムの 為 に 禱 る、

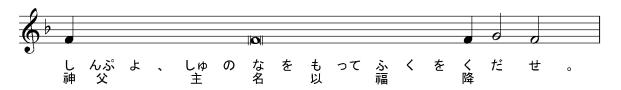


司祭) **又** 衆 兄 弟 及び 衆 ハリスティアニンの爲に禱る、



けだしなんぢ じんじ ひと あい かみ われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま 司祭) 蓋 爾 は仁慈にして人を愛する神なり、我等光 榮を 爾 父と子と聖 神に獻ず、今も いっ よよ 何時も世世に、





こうえい いつせい いのち ほどこ わか せいさんしゃ き いま いつ よよ 司祭) 光 榮は一 性にして生命を 施 す分れざる聖 三 者に歸す、今も何時も世世に、



【 六段聖詠 】 (晩堂課から続く時、ここから始める)

いとたかき こうえいかみ き ち へいあんくだ ひと めぐみ のぞ 誦經) **至 高 には光 榮 神に歸し、地には平 安 降り、人に 惠 は臨めり**。 いとたかき こうえいかみ き へいあんくだ のと めぐみ のぞ あり。 至 高 には光 榮 神に歸し、地には平 安 降 り、人に 惠 は臨めり。 いとたかき こうえいかみ き し、地には平 安 降 り、人に 惠 は臨めり。 全 高 には光 榮 神に歸し、地には平 安 降 り、人に 惠 は臨めり。 上ゥ よ、我が 唇 を啓けよ、然せば我が口は 爾 の讃美を揚げんとす。 主よ、我が 唇 を啓けよ、然せば我が口は 爾 の讃美を揚げんとす。

【 第3聖詠 】

主よ、我が敵は何ぞ多き、多くの者は我を攻む、多くの者は我が靈いを指して、かれははかみよりすくい。を得ずと云う。然れども主よ、爾は我を衛る盾なり、我の榮なり、爾は我が首を擧ぐ、我が聲を以て主に呼ぶに、主は其聖山より我に聽き給う。我臥し、寝ね、なんぢので、まは我を押ぎ衞ればなり。環りて我を攻むる萬民は、我之を懼れざらん。主よ、起きよ、吾が神よ、我を救い給え。蓋爾は我が諸敵の頬を批ち、惡人の歯を折けり。教は主に依る、爾の降福は爾の民に在り。

【 第37聖詠 】

む、主我が神よ、爾 聴き給わん。我言えり、願わくは敵は我に勝たざらん、我が足の 跌 く時、彼等は我に向いて誇り高ぶる。我 殆 ど仆れんとす、我の 憂 は常に我が前に在り。我は我が不法を認め、我が罪の為に 甚 哀 む。我が敵は生きて 愈 強く、故なくして我を疾む者は 益 多し、惡を以て我の善に報ゆる者は、我が善に 従 うに因りて我の敵となれり。主我が神よ、我を遺つる毋れ、我に遠ざかる毋れ、主我の 救 主よ、まみやか きた りて我を救い給え。

【 第62聖詠 】

光 榮 は 爻 と子と 聖 神 に歸す、今 も何時も世世に。アミン。

アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、神 よ光 榮 は 爾 に歸す。

アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、神 よ光 榮 は 爾 に歸す。

アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、神 よ光 榮 は 爾 に歸す。

(後三段は省略)

【 大聯禱 】

ったりあんわ しゅ いの 可祭) **我等安和にして主に禱らん、**



うえ くだ あんわ われら たましい すくい ため しゅ いの 司祭) 上より降る安和と我等が 靈 の 救 の為に主に禱らん、



ぜんせかい あんわ かみ せい しょきょうかい けんりつ およ しゅうじん ごういつ ため しゅ いの 司祭) 全世界の安和、神の聖なる諸教曾の堅立、及び衆人の合一の爲に主に禱らん、



こ せいどう およ しん つつしみ かみ おそ こころ もつ ここ きた もの ため しゅ いの 司祭)此の聖堂、及び信と 慎 と神を畏るる心 とを以て此に來る者の爲に主に禱らん、



きょうかい つかさど そんき われら ぜんにつぽん ふしゅきょう でい そんき われら せんだい だい 司祭) 教 曾を 司 る尊貴なる我等の全 日本の府主教ダニイル、尊貴なる我等の仙 台の大 しゅきょう ことごと きょうしゅう およ 主教 セラフィム、司祭の尊品、ハリストスに因る輔祭職、 悉 くの教 衆、及び 衆 人の為に主に禱らん、



司祭) 我國の天皇、及び國を司る者の爲に主に禱らん、



こ まち およそ まち ちほう ため およ しん もっ こ うち お もの ため しゅ いの 司祭) 此の都邑と 凡 の都邑と地方の爲、及び信を以て此の中に居る者の爲に主に禱らん、



きこうじゅんわ ごこくほうじょう てんかたいへい ため しゅ いの司祭) 氣候順和、五穀豐 穣、天下泰平の爲に主に禱らん、



コ祭)航海する者、旅行する者、病を患うる者、艱難に遭う者、據となりし者、及び かれら すくい ため しゅ いの 彼等の 救 の為に主に禱らん、



おれらもろもろ うれい いかり あやうき まぬが ため しゅ いの 司祭) 我等 諸 の憂愁と忿怒と危 難とを 免 るるが爲に主に禱らん、



かみ なんぢ おんちょう もつ われら たす すく あわれ まも司祭) 神よ、爾の恩 寵を以て、我等を佑け救い 憐 み護れよ、



司祭) 至聖至潔にして至りて讃美たる我等の光 榮の女 宰、生 神 女、永 貞 童 女マリヤと、 しょせいじん きおく ことごと の身及び 互 に 各 の身を以て、並 に 悉 くの我等の といのち もつ ならび ことごと かみ いたく 生命を以て、ハリストス神に委託せん、



けだしおよ こうえいそんきふくはい なんぢちち こ せいしん き いま いっ よよ 司祭) 蓋 凡そ光榮尊貴伏拝は爾 父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、



われやちゅうわ たましい なんぢ した あした わ ちゅうしん なんぢ たづ 司祭) 我 夜 中我が 靈 にて 爾 を慕えり、 晨 より我が 中 心 にて 爾 を尋ねん。



なんぢ しんぱん ち おこな とき よ お もの ぎ まな 司祭) **爾 の審 判が地に 行 わるる時、世に居る者は義を學ぶ**。



ひなんぢ てき か **司祭)火は 爾 の敵を噛まん。**



しゅ なんぢすで たみ ま すで たみ ま おのれ こうえい あらわ 司祭) 主よ、爾 已に民を増し、已に民を増して、己 の光 榮を 顯 せり。



われらむけい ぐん ゆうけい しるし もっ かたち うえ ぞくしん おもい のぼ せいさん 第1調) 我等無形の軍の有 形の 徴 を以て、形 より上なる屬 神の意思に升せられ、聖 三の うた よ さんい しんせい ひかり う ごと ゆいいち かみ よ歌に由りて三位の神 性の 光 を受けて、ヘルヴィムの如く惟 一の神に呼ばん、

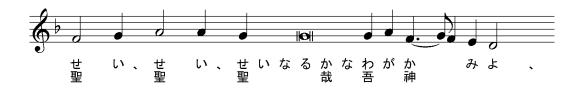
しぜんしゃ われらち あ てんじょう ぐん なら かちうた なんぢ たてまっ 第2調) 至善者よ、我等地に在りて 天 上の軍に效いて、凱歌を爾に 奉 る、

nstein わか さんしゃ さんい どうえいざい ゆいいちしゃ われらなんぢかみ てんし 第3調) 一性にして分れざる三者、三位にして同永在なる惟一者よ、我等爾神に天使の うた たてまっ 歌を奉る、

なんぢ むけい えきしゃ うた われらし もの いさみ もつ なんぢ たてまつ い 第 4 調) 爾 の無形なる 役 者 の 歌 を、我 等死すべき 者 は勇敢を 以 て 爾 に 奉 りて曰う、

かしょう こく きとう とき われらねつせつ ゆいいち かみ よ 第5調) 歌頌の刻、祈禱の時なり、我等熱切に惟一の神に呼ばん、

- ら おそれ もつ まえ た ら つつし おのの もだ こえ もつ 第6調) ヘルヴィム等は 畏 を以て前に立ち、セラフィム等は 敬 み 慄 きて、黙さざる聲を以て せいさん うた たてまつ かれら とも われらつみ もの よ 聖 三の歌を 奉 る、彼等と偕に我等罪なる者も呼ぶ、
- でんじょう ぐん ち かしょう しんせい こうえい うち しょてんし ふくはい 第 7 調) 天 上の軍たるヘルヴィム等に歌 頌せられ、神 聖なる光 榮の中に諸天使に伏 拜せ かみ われらちじょう あ ふとう くち もつ なんぢ さんび たてまつ もの い たま らるる神よ、我等地上に在りて不當なる口を以て 爾 に讃美を 奉 る者をも納れ給え、
- われらこころ てん あ てんし ひんい なら おそれ もっ しんぱんしゃ まえ ふふく しょうり 第8調) 我等 心 を天に擧げ、天使の品位に效ひて、畏 を以て審 判 者の前に俯伏して、勝 利 さんび よ の讃美を呼ばん、





- こうえい ちち こ せいしん き 誦經) **光 榮 は 父 と 子 と 聖 神 に 歸 す**、
- ※その週の調により替える。
 ※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※
 ※ その週の調により替える。
- われらしゅうてんぐん とも いとたか お もの せいさん さんぴ たてまっ ごと 第1調) **我等 衆 天 軍と偕に最 高きに居る者に聖 三の讃美を 奉 りて、ヘルヴィムの如く** よ **呼ばん、**
- っく せい ばんゆう ぞうせいしゅ われら くち ひら たま わ なんぢ さんぴ った 第2調)造られざる性、萬有の造成主よ、我等の口を開き給え、我が爾の讃美を伝えて ょ ため 呼ばん爲なり、
- おげん ちち どうむげん こ どうえいざい しん ゆいいち しんせい われら ごと ゆうかん 第3調)無原の父、同無原の子、同 永 在の神たる惟 一の神 性を我等へルヴィムの如く勇 敢 もつ さんえい い を以て讃 榮して曰う、
- しぜんしゃ てんし ひんい てん お ごと われらひと はんれつ ち おい いまおそれ もっ 第4調) 至善者よ、天使の品位が天に於ける如く、我等人の班列は地に於て今 畏 を以て

かちうた なんぢ たてまつ 凱歌を爾に奉る、

むげん さんしゃ われらいさみ もつ なんぢ むけい ぐん かたど ふとう くち よ 第 5 調)無原なる三者よ、我等勇敢を以て爾の無形の軍を象りて、不當なる口にて呼ぶ、

わ かみ りくよく もの むけい くち もだ さんしょう もつ なんぢ せいさん うた よ われ 第 6 調) 我が神よ、六 翼の者は無形の口、黙さざる 讃 頌 を以て 爾 に聖 三の歌を呼ぶ、我

らちじょう もの ふとう くち もつ なんぢ さんび たてまっ 等地 上の者も不當なる口を以て 爾 に讃美を 奉 る、

たましい ねむり ごと おこたり しりぞ しんぱんしゃ さんび はげ おそれ もっ よ第 7 調) 靈 よ 眠 の如く怠 惰を 退 け、審 判 者を讃美せんことを勵みて、畏 を以て呼べ、

\$ 8調) **ヘルヴィム等は敢て 爾 を仰ぎ視ずして、環り飛びて、神 聖なる聖 三の歌を 奉 る、**かれら とも われら なんぢ よ

彼等と偕に我等も爾に呼ぶ、



いま いっ よよ 誦經) **今も何時も世世に、アミン。**

しぜんしゃ われらさ お なんぢ ふくはい ぜんのうしゃ てんし うた もつ なんぢ よ第1調) 至善者よ、我等寤め興きて 爾 に伏 拜す、全 能 者よ、天使の歌を以て 爾 に呼ぶ、

しゅ なんぢ われ さ とこ おこ わ ちえ こころ てら わ くち ひら なんぢ 第2調) 主よ、爾 は我を覺まして榻より起せり、我が智慧と 心 とを照し、我が口を開きて 爾 せいさんしゃ うた たま 聖 三 者を歌わしめ給え、

しんぱんしゃにわか きた ひとびと おこない あらわ ゆえ われらやはん おそ よ 第3調) 審判者 俄に來りて、人人の 行 は顯れん、故に我等夜半に畏れて呼ぶ、

かみ なんぢ むげん ちち なんぢ なんぢ しせい しん われら 第4調) ハリストス 神よ、 爾 の無原なる父と、 爾 と、 爾 の至聖なる神とを、我等へルヴィ

ごと いさみ もっ さんえい い ムの如く勇敢を以て讃 榮して曰う、

どうていぢょ はら い ちち ふところ はな かみ しょてんし とも われら 第5調) 童 貞 女の胎に入りて、父の 懐 を離れざりしハリストス 神よ、諸 天使と 偕に 我等を う たま けだしわれらよ も受け給え、 蓋 我等呼ぶ、

せいさん ゆいいちしゃ しんせい こんこう ごういつ おい さんえい われらてんし うた よ第 6 調) 聖 三なる惟 一者の神性を混淆せざる合一に於て讃榮して、我等天使の歌を呼ぶ、

ちか がた しんせい ゆいいち さんしゃ せいさん さんび たてまっ おそ もっ 第7調) 近づき難き神性、惟一の三者に、セラフィムの聖三の讃美を 奉 りて、畏を以て よ 呼ばん、

われらおお つみ かが あえ てん たかき あお み たましい からだ もつ ふふく 第8調) 我等多くの罪に屈められ、敢て天の 高 を仰ぎ視ずして、 靈 と 體 とを以て俯伏 しょてんし とも なんぢ うた たてまつ して、諸天使と偕に 爾 に歌を 奉 る、



誦經)今も何時も世世に、アミン。

【 第134聖詠 】

主の名を讃め揚げよ、主の諸 僕、主の家、我が神の家の庭に立つ者よ、讃め揚げよ。主を讃め揚げよ、主は仁慈なればなり、其名に歌え、是れ樂しければなり。 蓋 主は 己 の為にイアコフを選び、イズライリを選びて其 業 となせり。我 主の 大 なるを知り、我等の主

の諸神よりものたちもも高きを知れり。主は凡そ欲する所を天に地に海にことくの淵に活されてう、雲を地の極より起し、い電を前のつもに作り、風を其庫より出す。が他はエギペトの初子を撃ちて、人より家畜に及べり。エギペトよ、彼は爾の中に於て、休、徴奇迹をファラオン及び其一悉くの僕の上に遺せり。彼は多くの民を撃ち、有力の王を調せり、節アモレイの王シゴン、ヴァサンの王オグ、及びカナアンの諸国なり、彼等のもたい。業となし、其民イズライリの業となせり。主よ、爾の名は永く在り、主よ、ななちの記憶は世世に在り。蓋主は其民を審判し、其諸僕に 憐を垂れん。異邦の偶像は 乃 銀、 乃 金、人の手の造工なり。彼等口ありて言わず、目ありて見ず、耳ありて象が、其口に呼吸なし。之を造る者と凡そ之を恃む者とは是と相似ん。イズライリの家よ、主を崇め讃めよ。アアロンの家よ、主を崇め讃めよ。レヴィの家よ、上きを崇め讃めよ。アフンの家よ、主を崇め讃める。アリルイヤ。

こうえい ちち こ せいしん き 光 榮は父と子と聖神に歸す、

しゅあ わ れ め 、しゅあ わ れ め 、しゅあ わ れ 主 憐 主 憐 主 憐





【 第137聖詠 】

りまもいつもよよ に、アミン。 今 何時 世世





新經) 今 も何時も世世に、アミン。

【 第142聖詠 】

しゅ わ いのり き なんぢ しんじつ よ わ ねがい みみ かたぶ なんぢ ぎ よ われ 主 よ、我が 禱 を聆き、爾 の 眞 實に依りて我が 願 に 耳 を 傾 けよ、爾 の義に依りて 我 き たま x_{0} ぼく うつたえ x_{0} なか けだしおよ いのち もの いっ x_{0} なんぢ まえ ぎ に聽き給え。 爾 の僕と 訟 を爲す毋れ、 蓋 凡そ生命ある者は、一も 爾 の前に義と てき わ たましい お われ いのち ち ふみにじ われ ひさ し もの ごと せられざらん。敵は我が 靈 を逐い、我が生命を地に 蹂 り、我 を久 しく死せし者 の 如 く くらき ぉ ゎ たましい われ うち もだ ゎ こころ われ うち むな ごと われいにしぇ 暗 に居らしむ、我が 靈 は我の衷に悶え、我が 心 は我の衷に曠しきが如し。我 古 ひ おも およ なんぢ おこな かんが なんぢ て わざ はか わ て の なんぢ **の日を 想 い、凡 そ 爾 の 行 いしことを 考 え、 爾 が手の工作を計 る。我が手を伸べて 爾** to たましい かわ ち ごと なんぢ した しゅ すみやか われ き たま わ たましい **に向かい、我が** 靈 は渇ける地の如く爾を慕う。主よ、速 に我に聽き給え、我が 靈 は衰えたり、爾の顔を我に隱す毋れ、然らずば我は墓に入る者の如くならん。我 っと なんぢ あわれみ き たま われなんぢ たの しゅ われ ゆ みち しめ たま **に夙に爾の 憐を聽かしめ給え、我爾を賴めばなり。主よ、我に行くべき途を示し給** $\frac{1}{2}$ たましい なんぢ あ しゅ われ わ てき すく たま われなんぢ はし つ え、我が 靈 を 爾 に擧ぐればなり。主 よ、我 を我が 敵 より 救 い 給 え、我 爾 に 趨 り附く。 われ なんぢ むね おこな おし たま なんぢ われ かみ ねが なんぢ ぜん しん 我に 爾 の旨を 行 うを教え給え、爾 は我の神なればなり、願わくは 爾 の善なる神は ζ_{ab} ひ いだ たま なんぢ あわれみ もっ わ てき ほろぼ およ わ たましい せ もの を苦難より引き出し給え、爾 の 憐 を以て我が敵を 滅 し、凡 そ我が 靈 を攻むる者 たいら たま われ なんぢ ぼく **を 夷 げ給え、我は 爾 の僕なればなり**。

こうえい ちち こ せいしん き 光 榮は父と子と聖神に歸す、





アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、かみよ、こうえいは なんぢにき す 。 神 光 榮 爾 歸



アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、かみよ、こうえいは なんぢにき す 。 神 光 榮 爾 歸



アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、かみよ、こうえいはなんぢにき す 。 神 光 榮 爾 歸



※ 三歌齋經を見る。「第二の誦文の後」に指定する坐誦讃詞、十字架生神女讃詞を誦す。



【第50聖詠】

こうえい ちち こ せいしん き いま いっ よよ 光 榮は父と子と聖 神に歸す、今も何時も世世に、アミン。

もつて我を固め給え。我不法の者に爾の道を教えん、不虔の者は爾に歸らんとす。神よ、我が救の神よ、我を血より救い給え、然せば我が舌は爾の義を讃め揚げん。主よ、我が唇を啓け、然せば我が口は爾の讃美を揚げん、蓋爾は祭を欲せず、欲せば我が口はな解い。神に喜ばるる祭は痛悔の霊なり、なんち、なんち、神に喜ばるる祭は痛悔の霊なり、なり、なんち、神よ、できまつりない。神に喜ばるる祭は痛悔の霊なり、なり、痛悔して謙遜なる心は、神よ、爾軽んじ給わず。主よ、爾の惠に因りて恩をシオンに垂れ、イェルサリムの城垣を建て給え。其時に爾義の祭、獻物と燔祭とを喜び饗けん、其時に人人爾の祭壇に犢を奠えんとす。

司祭)神よ、爾の民を救い、及び爾の嗣業に福を降し給え、慈憐と洪恩とを以て爾の世界に臨み、正教のハリスティアニン等の角を高うし、我等に爾の豐なる憐を主動した。 本人ち の 豊なる 憐を生れ給え、至淨なる我等の光榮の女宰・生神女・永貞童女マリヤの論と、生命を施す尊き十字架の力と、無形なる尊き天軍、光榮なる尊き預言者・前驅・じゅせん オアン、光榮にして讃美たる聖使徒、我等の聖神父・世界の大教師・成聖者・大丁・シリィ、神學者グリゴリイ、金口イォアン、我等の聖神父・ミラリキヤの大力を一番である。 まました こうえい 大口をきょう きまらしゃ こうえい 大生な から ではない 大大主教・奇蹟者ニコライ、我等の聖神父・日本の亜使徒・大主教ニコライ、光榮なる 動 旋の聖致命者、克肖棒神なる我が諸神父、聖にして義なる神の祖父母イォアキムないないまた。 またい 大力・大きないまた こくしょうほうしん ないまたが、世界の大人主教・高蹟者に見りて、大仁慈の主よ、爾に求む、我等罪人爾に禱る者に静き納れて、我等を憐めよ、



ったい とも さんよう いま いっ よよ す 爾 の神と偕に讃 揚せらる、今も何時も世世に、



【 規程(カノン) 】

※三歌齋經を見る。指定する歌頌を行う。



【 小聯禱 】(第八歌頌の前)

った。 おれらまたまたあんわ しゅ いの 可祭) **我等復又安和にして主に禱らん、**



かみ なんぢ おんちょう もつ われら たす すく あわれ まも 司祭)神よ、爾の恩寵を以て、我等を佑け救い憐み護れよ、





けだしなんぢ われら かみ われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いっ よよ司祭) 蓋 爾 は我等の神なり、我等光 榮を 爾 父と子と聖 神に獻ず、今も何時も世世に、



※三歌齋經を見る。第八歌頌を行う。

【 我が心は主を崇め 】

しょうしんぢょ ひかり はは ほめうた もっ ほ あ 司祭) 生神女、光の母を讃歌を以て讃め揚げん、







※三歌齋經を見る。第九歌頌を行う。

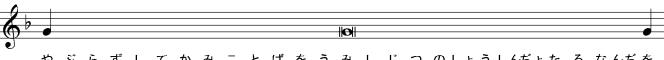












やぶらずしてかみことばをうみしじつのしょうしんぢょたるなんぢを 壊 生 神女 爾



【小聯禱】

われらまたまたあんわ しゅ いの 司祭) **我等復 又安和にして主に禱らん、**



かみ なんぢ おんちょう もつ われら たす すく あわれ まも 司祭) 神よ、爾の恩寵を以て、我等を佑け救い憐み護れよ、



司祭) 至聖至潔にして至りて讃美たる我等の光 榮の女 宰、生 神 女、永 貞 童 女マリヤと、
しょせいじん きおく われらおのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならび ことごと われら 諸 聖 人を記憶して、我等 己 の身及び 互 に 各 の身を以て、 並 に 悉 くの我等の
いのち もつ ならび なんの我等の



けだしてん しゅうぐんなんぢ さんよう われら こうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いっ 司祭) 蓋 天の衆 軍 爾 を讃 揚す、我等も光 榮を 爾 父と子と聖 神に獻ず、今も何時も よよ 世世に、



【 光耀歌 】

第1調) 主よ、光 を 耀 かし、爾 の十字架の 力 にて、主よ、我が 靈 を 諸 の罪より淨 めて、我を救い給え。

こうえい ちち こ せいしん き 光 榮は父と子と聖神に歸す、

いま - いっ - よよ **今 も何時も世世に、アミン、**

しゅ ひかり かがや しょうしんちょ きとう よ わ たましい もろもろ つみ きよ 主 よ、光 を 耀 かし、生 神 女の祈禱に因りて、我が 靈 を 諸 の罪より淨めて、 われ すく たま 我を救い給え。

第2調) ハリストス神よ、爾の永在の光を遣し、爾の十字架の力にて、主よ、我が心 の無形の目を照して、我を救い給え。

こうえい ちち こ せいしん き 光 榮は父と子と聖神に歸す、

いま いっ よよ 今も何時も世世に、アミン、

かみ なんぢ えいざい ひかり つかわ しょうしんぢょ きとう よ わ こころ ハリストス 神よ、 爾 の永 在の 光 を 遣 し、 生 神 女の祈禱に因りて、我が 心 の むけい め てら われ すく たま 無形の目を照して、我 を 救 い給 え。

第3調) ハリストス神よ、爾の光を遣し、爾の十字架の力にて、主よ、我が心を照 して、我を救い給え。

こうえい ちち こ せいしん き 光 榮は父と子と聖神に歸す、

かみ なんぢ ひかり つかわ なんぢ せいじん きとう よ わ こころ てら ハリストス神よ、爾 の 光 を 遣 し、爾 が聖 人の祈禱に因りて、我が 心 を照して、 われ すく たま 我を救い給え。

いま いっ よよ 今 も何時も世世に、アミン、

ハリストス 神 よ、 爾 の 光 を 遣 し、 生 神 女 の祈禱に因りて、我が 心 を照して、 われ すく たま 我 を 救 い 給 え。

こうえい ちち こ せいしん き 光 榮は父と子と聖神に歸す、

Loo なんぢ せかい ひかり かがや なんぢ せいじん きとう よ くらやみ あ わ たましい 主よ、爾 の世界に 光 を 輝 かし、爾 が聖 人の祈禱に因りて、幽 暗に在る我が 霊 もろもろ つみ きょ われ すく たま を 諸 の罪より潔めて、我を救い給え。

いま いっ よよ 今 も何時も世世に、アミン、

しゅ なんぢ せかい ひかり かがや しょうしんぢょ きとう よ くらやみ あ わ たましい主よ、爾の世界に光を輝かし、生神女の祈禱に因りて、幽暗に在る我が靈

^{もろもろ} つみ きょ われ すく たま **を 諸 の罪より潔めて、我を救い給え。**

こうえい ちち こ せいしん き 光 榮は父と子と聖神に歸す、

ひかり ほどこ しゅ なんぢ ひかり つかわ なんぢ せいじん きとう よ わ こころ てら 光 を 施 す主よ、爾 の 光 を 遣 し、爾 が聖 人の祈禱に因りて、我が 心 を照し われ すく たま て、我を救い給え。

いま - いっ - よよ **今 も何時も世世に、アミン、**

しゅ なんぢ じゅうじか ちから しゅ なんぢ えいざい ひかり われら たましい つかわ たま 第6調) 主よ、爾の十字架の力にて、主よ、爾の永在の光を我等の靈 に造し給え。

こうえい ちち こ せいしん き 光 榮は父と子と聖神に歸す、

しゅ なんぢ せいじん きとう よ なんぢ えいざい ひかり われら たましい つかわ たま 主 よ、 爾 が聖 人の祈禱に因りて、 爾 の永 在の 光 を 我等の 靈 に 遣 し給え。 今も何時も世世に、アミン、

しゅ しょうしんぢょ きとう よ なんぢ えいざい ひかり われら たましい つかわ たま 主よ、生 神女の祈禱に因りて、爾の永在の光を我等の 靈 に 遣 し給え。

第7調) 主よ、我を起して 爾 を歌わしめ、聖なる者よ、 爾 の十字架の 力 にて、主よ、我 に 爾 の旨を 行 わんことを教えて、我を救い給え。

こうえい ちち こ せいしん き 光 榮は父と子と聖神に歸す、

しゅ われ おこ なんぢ うた せい もの なんぢ せいじん きとう よ われ 主よ、我を起して 爾 を歌わしめ、聖なる者よ、 爾 が聖 人の祈禱に因りて、我に なんぢ むね おこな おし われ すく たま 爾 の旨を 行 わんことを教えて、我を救い給え。

いま 今も何時も世世に、アミン、

しゅ われ おこ なんぢ うた せい もの しょうしんぢょ きとう よ われ なんぢ 主 よ、我を起して 爾 を歌わしめ、聖なる者よ、生 神 女の祈禱に因りて、我に 爾 むね おこな の旨を 行 わんことを教えて、我を救い給え。

 ひかり
 なんぢ じゅうじか ちから しゅ みづか われ てら われ すく

 第8調) 光 なるハリストスよ、爾 の十字架の 力 にて、主よ、親 ら我を照して、我を救い

^{たま} **給え。**

こうえい ちち こ せいしん き 光 榮は父と子と聖神に歸す、

ひかり なんぢ せいじん きとう よ みづか われ てら われ すく たま 光 なるハリストスよ、 爾 が聖 人の祈禱に因りて、 親 ら我を照して、我を救い給え。

いま いっ よよ **今 も何時も世世に、アミン、**

【 第148聖詠 】

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ 光 榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、アミン。

しゅわれら かみ こうえい なんぢ き われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いっ主 我等の神よ、光 榮は 爾 に歸す、我等光 榮を 爾 父と子と聖 神に獻ず、今も何時よよ

こうえい なんぢ われら ひかり あらわ しゅ き 光 榮は 爾 、我等に 光 を 顯 せる主に歸す。

いとたかき こうえいかみ き ち へいあんくだ ひと めぐみのぞ しゅてん おう かみちち 至 高 には光 榮 神に歸し、地には平 安 降 り、人には 惠 臨 めり。主 天の王、神 父 ばんのうしゃ しゅどくせい こ およ せいしん なんぢ おおい こうえい よ 全 能 者 よ、主 獨 生 の子イイススハリストス、及び聖 神よ、 爾 の 大 なる光 榮に因り

て、我等爾を崇め、爾を讃め揚げ、爾を伏し拜み、爾を尊み歌い、瑜がに感謝す。主神よ、神の 羔 、父の子、世の罪を任いし者よ、我等を 憐 み給え、世の 諸 の罪を任いし者よ、我等を 憐 み給え、世の 諸 の罪を任いし者よ、我等を 憐 み給え、世の 諸 の罪を任いし者よ、我等を 憐 み給え、世の 諸 の罪を任いし者よ、我等を 憐 み給え。 父の右に坐する者よ、我等を 憐 み給え。 アミン。

われやや なんぢ ほ あ なんぢ な よよ あが うた **我 夜夜に 爾 を讃め揚げ、 爾 の名を世世に 崇め 歌 わん。**

主よ、爾は世世我等の避所たり。我曾て言えり、主よ、我を憐み、我が靈を醫したま、物れつみなんち、えたればなり。主よ、爾に趨り附く、爾の旨を行うを我に教し給え、我罪を爾に得たればなり。主よ、爾に趨り附く、爾の旨を行うを我に教えたま、なんち、おれの神、生命の源は爾に在ればなり、我等爾の光に於て光を觀ん。憐を爾を知る者に恒に垂れ給え。

主よ、我を守り罪なくして此の夜を度らせ給え。主吾が先祖の神よ、爾は崇め讃めなんぢななまましきうとうた **られ爾の名は世世に尊み歌わる、アミン。**

【 增聯禱 】

司祭) 我等主の前に吾が朝の稿を増し加えん、



nみ なんぢ おんちょう もつ われら たす すく あわれ まも 司祭) 神よ、爾の恩 寵を以て、我等を佑け救い 憐み護れよ、



こ ひ じゅんぜん せいせい へいあん むざい しゅ もと 司祭) 此の日の 純 全・成 聖・平 安・無罪ならんことを主に求む、



へいあん てんし ただ きょうどうし わ れいたい しゅごしゃ たま しゅ もと 司祭) 平安の天使、正しき教 導師、吾が靈體の守護者を賜わんことを主に求む、



司祭) **我等の罪と 過 とを宥め赦さんことを主に求む、**



われら たましい ぜん えき こと およ せかい へいあん たま しゅ もと 司祭) **我等の 靈 に善にして益ある事、及び世界に平 安を賜わんことを主に求む、**



司祭) 我等の生命の餘日を平安と痛悔とを以て終らんことを主に求む、



司祭)我等の生命の終がハリスティアニンに適い、疾なく、耻なく、平安なること、及びハリストスの畏る可き審判に於て宜しき對をなすを賜わんことを求む、



司祭)至聖至潔にして至りて讃美たる我等の光 榮の女 宰、生 神 女、永 貞 童 女マリヤと、 しょせいじん きおく まる記憶して、我等 己 の身及び 互 に 各 の身を以て、 並 に 悉 くの我等の 生命を以て、ハリストス神に委託せん、



けだしなんち じんじ じれん じんあい かみ われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま司祭) 蓋 爾 は仁慈と慈憐と仁 愛との神なり、我等光 榮を 爾 父と子と聖 神に獻ず、今 しつ よよ も何時も世世に、



しゅうじん へいあん 司祭) **衆 人に平安、**



司祭) 我等の首を主に屈めん、



司祭)(黙誦: 聖なる主、高きに居り 卑 きを臨み、爾 が見ざる 所 なき目にて萬 物を 鑒 るもの まれらこころ からだ くび なんぢ まえ かが なんぢ いの 者 よ、我等 心 と 體 との項を 爾 の前に屈めて 爾 に禱る、 爾 が見えざる手を 爾 が 聖なる住居より伸べて、我等 衆 人 に福を降し給え、我等に自由 或 は自由ならずして犯しし罪あらば、爾 善にして人を愛する神なるに依りて之を赦して、我等に今世來世のしよぜん あた たま 諸 善を與え給え、)



- ※ 三歌齋經を見る。指定された挿句讃詞、致命者讃詞、光榮…今も…、十字架生神女讃詞。句は次の 通り。
- しゅ つと なんぢ あわれ もつ われら あ しか われらしょうがいよろこ たのし なんち ①主よ、夙に爾の憐みを以て我等に飽かしめよ、然せば我等生涯歡び樂まん。爾

われら う ひ われら わざわい あ とし か われら たのし たま ねが なんぢ わざ 我等を撲ちし日、我等が 禍 に遭いし年に代えて、我等を 樂 ましめ給え。願わくは 爾 の工作 なんぢ しょぼく あらわ なんぢ こうえい その しょし あらわ は 爾 の諸 僕に 著 れ、 爾 の光 榮は其の諸子に 著 れん。

aが しゅわ かみ めぐみ われら あ ねが わ て わざ われら たす たま わ て **②願わくは主吾が神の 惠 は我等に在らん、願わくは我が手の工作を我等に助け給え、我が手の** わざ たす たま **工作を助け給え。**

しじょうしゃ しゅ きんえい なんぢ な うた なんぢ あわれみ あさ の なんぢ まこと よる 誦經) 至 上 者よ、主を讃 榮し、爾 の名に歌い、爾 の 憐 を朝に宣べ、爾 の 眞 を夜に の び 宣ぶるは美なるかな。

しじょうしゃ しゅ さんえい なんぢ な うた なんぢ あわれみ あさ の なんぢ まこと よる 至上者よ、主を讃榮し、爾の名に歌い、爾の 憐 を朝に宣べ、爾の 眞 を夜に の び 宣ぶるは美なるかな。

せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ 聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常 生の者よ、我等を 憐 めよ。

せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ 聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常 生の者よ、我等を 憐めよ。

せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ 聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常 生の者よ、我等を 憐 めよ。

こうえい ちち こ せいしん き いま いっ よよ 光 榮 は 父 と子と 聖 神 に歸す、今 も何時も世世に、アミン。

Ltvi さんしゃ われら あわれ しゅ われら つみ いさぎょ しゅさい われら あやまち ゆる 至聖三者よ、我等を 憐 め。主よ、我等の罪を 潔 くせよ。主 宰よ、我等の 愆 を赦せい もの のぞ われら やまい いや たま ことごと なんぢ な よせ。 聖なる者よ、臨みて我等の 病 を癒し給え。 悉 く 爾 の名に因る。

しゅ あわれ しゅ あわれ しゅ あわれ 主、 憐 めよ。主、 憐 めよ。主、 憐 めよ。

こうえい ちち こ せいしん き いま いっ よよ 光 榮は父と子と聖 神に歸す、今も何時も世世に。アミン。

てん いま われら ちち ねがわく なんぢ な せい 天に在す我等の父よ、 願 は 爾 の名は聖とせられ、 爾 の國は來り、 爾 の旨は天 おこな た わるるが如く、地にも 行 われん。我が日 用の糧を今 日 我等に 與え給え。我等に おいめ もの われらゆる ごと われら おいめ ゆる たま われら いざない みちび なおわれら 債 ある者を我等免すが如く、我等の 債 を免し給え。我等を 誘 に 導 かず、猶我等

きょうあく すく たまを凶 惡より救い給え。

けだしくに けんのう こうえい なんぢちち こ せいしん き いま いっ よよ司祭) 蓋 國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。



はようしんちょ てん もん われらなんぢ こうえい どう た こころ てん た ごと いの 生 神 女、天の門よ、我等 爾 が光 榮の堂に立つに、 意 は天に立つが如し、祈る、 われら ため なんぢ あわれみ もん ひら たま 我等の爲に 爾 が 憐 の門を開き給え。

Lゅ あわれ しゅ あわれ しゅ あわれ 主、 **憐 めよ。主、 憐 めよ。主、 憐 めよ**。

こうえい ちち こ せいしん き いま いっ よよ 光 榮 は 父 と子と 聖 神 に歸す、今も何時も世世に、アミン。

へルヴィムより 尊 く、セラフィムに 並 なく 榮 え、貞操を 壊 らずして 神 言 を生みし 實 の しょうしんちょ なんぢ あが ほ 生 神 女 たる 爾 を崇め讃む。

しんぷ しゅ な も ふく くだ 神父よ、主の名を以て福を降せ。

えいざい しゅ われら かみ つね あが ほ いっ よよ 司祭) 永在の主ハリストス我等の神は恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に、



【 聖エフレムの祝文 】

しゅ わ いのち しゅさい おこたり もだえ しのぎ むだごと こころ われ あた なか 司祭) 主、吾が生命の主 宰よ、怠 惰と、愁悶と、陵駕と、空 談の 情 を我に與うる勿れ。

 $_{\phi}$ みさお $_{\phi}$ つりくだり こらえ あい こころ われなんぢ ぼく あた たま 貞操と、謙 遜と、忍耐と、愛の情を我爾の僕に與え給え。

あ あ しゅおう われ わ つみ み わ けいてい ぎ たま けだしなんぢ よょ あが ほ 鳴呼、主 王 よ、我 に我が 罪 を見、我が 兄 弟 を議せざるを 賜 え、 蓋 爾 は世世に 崇 め讃 めらる、アミン。

かみ われざいにん きよ たま かみ われざいにん きよ たま かみ われざいにん きよ たま神よ我罪人を淨め給え、神よ我罪人を淨め給え、神よ我罪人を淨め給え、

かみ われざいにん きょ たま かみ われざいにん きょ たま かみ われざいにん きょ たま 神よ我罪人を淨め給え神よ、我罪人を淨め給え、神よ我罪人を淨め給え、

主、吾が生命の主 宰よ、怠 惰と、愁悶と、陵駕と、空 談の 情 を我に與うる勿れ。貞操と、謙 遜と、忍耐と、愛の 情 を我 爾 の僕に與え給え。鳴呼、主 王よ、我に我が罪を見、我が兄 弟を議せざるを賜え、 蓋 爾 は世世に崇め讃めらる、アミン。

【 第一時課 】

きた われら おう かみ こうはいふふく 水れ、ハリストス・我等の王・神に叩 拜俯伏せん。

きた われら おう かみ まえ こうはいふふく **來れ、ハリストス・我等の王と神の前に叩 拜俯伏せん。**

【 第5聖詠 】

【 第89聖詠 】

しゅ なんぢ よよ われら かくれが やまいま しょう なんぢいま ち ぜんせかい つく 主 よ、 爾 は世世に 我 等の 避 所 たり。 山 未 だ 生 ぜず、 爾 未 だ地と全 世界とを造ら

さき かつよ よ なんぢ かみ なんぢひと ちり かえ い ひと こ かえ **ざる先、且世より世までも 爾 は神なり。 爾 人を塵に歸らしめて曰う、人の子よ、歸れ** せんねん す さくじつ ごと やかん こう ごと なんぢ おおみづと。 蓋 爾 が目の前には、千 年は過ぎし昨 日の如く、夜間の更の如し。 爾 は大 水の ごと かれら なが かれら ゆめ ごと あさ お くさ ごと あさ はな かつあお くれ **如く彼等を流す、彼等は夢の如く、朝に生うる草の如し、朝には花さきて且 青し、暮** か か けだしわれら なんぢ いかり よ き なんぢ いきどおり よ おそ まど には刈られて稿る。 蓋 我等は 爾 の 怒 に因りて消え、 爾 の 憤 に因りて惶れ惑う。 まんぢ われら ふほう なんぢ まえ お われら かく こと なんぢ かんばせ ひかり まえ お 爾 は我等の不法を 爾 の前に置き、我等の隱れたる事を 爾 が 顔 の 光 の前に置け われら ことごと ひ なんぢ いかり うち す われら わ とし うしな おと ごと わり。我等が 悉 くの日は 爾 が 怒 の中に過ぎ、我等は我が歳を 失 うこと音の如し。我 とし かず しちじゅうねん あるい すこやか はちじゅうねん そのあいだ さかん とき くろう が歳の數は七十年、或は健なれば八十年なり、其間の壮なる時も、劬勞と やまい けだしそのす すみやか われらと さ だれ なんぢ いかり ちから し また疾病あり、 蓋 其過ぐること 速 にして、我等飛び去る。誰か 爾 が 怒 の 力 を知り、又 ちぇ こころ ぇ たま しゅ おもて かえ いづれ とき いた なんぢ ぼく あわれ えて、智慧の 心 を獲しめ給え。主よ、 面 を囘せ、 何 の時に至るか、 爾 の僕を 憐 み たま つと なんぢ あわれ もつ われら あ しか われらしょうがいよろこ たのし なんち給え。夙に 爾 の 憐 みを以て我等に飽かしめよ、然せば我等生 涯 歡 び 樂 まん。爾 われら う ひ われら わざわい あ とし か われら たのし たま ねが なんち 我 等を撲ちし日、我 等が 禍 に遭いし 年に代えて、我 等を 樂 ましめ給 え。願わくは 爾 かざ なんぢ しょぼく あらわ なんぢ こうえい その しょし あらわ ねが しゅわ かみ **の工作は 爾 の諸 僕に 著 れ、 爾 の光 榮は其の諸子に 著 れん、願わくは主吾が神の**

【 第100聖詠 】

こうえい ちち こ せいしん き いま いっ よよ 光 榮 は 父 と子と 聖 神 に歸す、今 も何時も世世に、アミン。

アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、神よ、光 榮は 爾 に歸す、

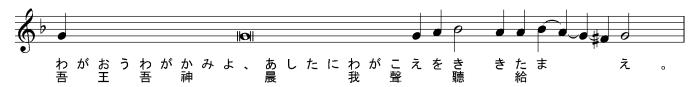
アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、神よ、光 榮は 爾 に歸す、

アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、神よ、光 榮は 爾 に歸す、

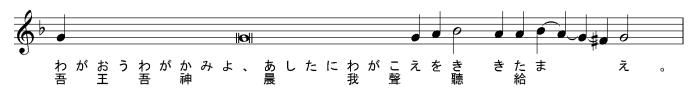
しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ 主 憐 めよ、主 憐 めよ、

【讃詞】

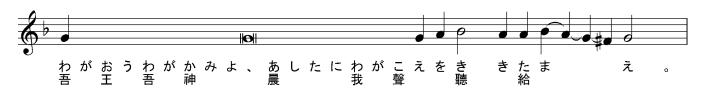
カ おうわ かみ あした わ こえ き たま 司祭) **吾が王吾が神よ、 晨 に我が聲を聽き給え、**



司祭) 主よ、我が言を聽き、我が思を悟れ、



司祭) 主よ、我爾に禱ればなり、



司祭)光榮は父と子と聖神に歸す、

誦經) 今 も何時も世世に、アミン。

鳴呼恩 寵に滿たさるる者よ、我等何を以て爾を稱せんか、天とせん、なんちぎの日を でいる。 でいた。 でいる。 でい。 でいる。

※第4週以外は次の讃詞を歌う。



※次ページ【 天主經 】へ。

※第4週、聖十字架が堂にある時は上の歌を歌わず、次の歌を歌う。



【 天主經 】

無經) 聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ 聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常 生の者よ、我等を 憐 めよ。

せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ 聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常 生の者よ、我等を 憐めよ。

こうえい ちち こ せいしん き いま いっ よよ 光 榮 は 父 と子と 聖 神 に歸す、今 も何時も世世に。アミン。

しせいさんしゃ われら あわれ しゅ われら つみ いさぎょ しゅさい われら あやまち 至聖三者よ、我等を 憐 め。主よ、我等の罪を 潔 くせよ。主 宰よ、我等の 愆 を ゆる せい もの のぞ われら やまい いや たま ことごと なんぢ な よ 赦せ。聖なる者よ、臨みて我等の病を癒し給え。 悉 く 爾 の名に因る。

Lゅ あわれ しゅ あわれ しゅ あわれ 主、 憐 めよ。主、 憐 めよ。主、 憐 めよ。

てん いま われら ちち ねが なんぢ な せい なんぢ くに きた なんぢ むね てん 天に在す我等の父よ、願わくは 爾 の名は聖とせられ、爾 の國は來り、爾 の旨は天 おこな だと ち おこな たちょう かて こんにちわれら あた たま われらに 行 わるるが如く、地にも 行 われん。我が日 用の糧を今日 我等に與え給え。我等に

おいめ もの われらゆる ごと われら おいめ ゆる たま われら いざない みちび なおわれ **債 ある者を我等免すが如く、我等の 債 を免し給え。我等を 誘 に 導 かず、猶 我** ら きょうあく すく たま **等を 凶 惡 より救い給え。**

けだしくに けんのう こうえい なんぢちち こ せいしん き いま いっ よよ司祭) 蓋 國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に。

誦經)アミン。

しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ き 憐 めよ、主 憐 めよ、

何の日何の時にも、天にも地にも叩拜讃樂せられ、寛忍、鴻慈、至善にして、義人を愛し、罪人を憐み、來世の福を約して萬の者を救に招くハリストス神よ、爾

「本のでは、一本

しゅあわれ しゅあわれ しゅあわれ 主 憐 めよ、主 憐 めよ、主 憐 めよ、

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ 光 榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、アミン。

へルヴィムより 尊 く、セラフィムに 並 なく 榮 え、貞操を 壞 らずして 神 言 を生みし 實の

しょうしんぢょ なんぢ あが ほ
生 神 女 たる 爾 を崇め讃む。

しんぷしゅなもつふくくだ神父よ、主の名を以て福を降せ、

かみ われら おん こうむ われら なく くだ なんぢ かんばせ もっ われら てら ならび 司祭) 神よ、我等に恩を 被 らし、我等に福を降し、爾 が 顔 を以て我等を照し、並 に われら あわれ たま 我等を 憐 み給え、

誦經)アミン。

※続けて三時課を行う場合は、39ページに飛ぶ。

司祭) 主、吾が生命の主 宰よ、怠 惰と、愁悶と、陵駕と、空 談の 情 を我に與うる勿れ。 みさお へりくだり こらえ あい こころ われなんぢ ぼく あた たま 貞操と、謙 遜と、忍耐と、愛の情を我 爾 の僕に與え給え。

ああ しゅおう われ わ つみ み わ けいてい ぎ たま けだしなんぢ よよ あが ほ 鳴呼、主 王 よ、我 に我が罪 を見、我が兄 弟 を議せざるを 賜 え、 蓋 爾 は世世に 崇 め讃 めらる、アミン。

かみ われざいにん きょ たま かみ われざいにん きょ たま かみ われざいにん きょ たま 神よ我罪人を淨め給え、神よ我罪人を淨め給え、神よ我罪人を淨め給え、神よ我罪人を淨め給え、

重なの光なるハリストス、凡そ世に來る人を照し且聖にする者よ、願わくは爾がかなばせのひかりは我等に輝き、我等は是に依りて近づき難き光を見るを得ん、願わくはなんち爾が至淨の母と、爾が諸聖人の祈禱に因りて、我等の足を爾の戒を行うにむかわしめ給え、アミン。





かみ われら たのみ こうえい なんぢ き こうえい なんぢ き 司祭)ハリストス・神・我等の 恃 よ、光 榮は 爾 に歸す、光 榮は 爾 に歸す、



司祭) ハリストス 我等の 眞 の神は、其 至 淨なる母の祈禱と、生命を 施 す 尊 き 十 字架の ちから こうえい カ と 光 榮にして讃美たる聖使徒、(某)、聖にして義なる神の祖父母イォアキ ム及びアンナ、及び諸 聖 人の祈禱に因て我等を 憐 み救わん、彼は善にして人を愛する主なればなり、





※早課・一時課終わり。

※三時課を続けて行う場合

司祭) 主、吾が生命の主 宰よ、怠 惰と、愁悶と、陵駕と、空 談の 情 を我に與うる勿れ。

みさお へりくだり こらえ あい こころ われなんぢ ぼく あた たま 貞操と、謙 遜 と、忍耐と、愛の 情 を我 爾 の僕に與え給え。

あった しゅおう われ わ つみ み わ けいてい ぎ たま けだしなんぢ よよ あが ほ 鳴呼、主 王 よ、我に我が罪を見、我が兄 弟を議せざるを賜え、 蓋 爾 は世世に 崇 め讃めらる、アミン。

かみ われざいにん きよ たま かみ われざいにん きょ たま かみ われざいにん きょ たま 神よ我罪人を淨め給え、神よ我罪人を淨め給え、神よ我罪人を淨め給え、神よ我罪人を淨め給え、神よ我罪人を淨め給え、神よ我罪人を淨め給え、神よ我罪人を淨め給え、神よ我罪人を淨め給え、神よ我罪人を淨め給え、神よ我罪人を淨め給え、神よ我罪人を淨め給え、 神よ我罪人を淨め給え、 神はだこと、 神ないこころ おれなんち ではく あた たま あが は と、 一次 と、 謙 遜 と、 忍耐と、 愛の情を我爾の僕に與え給え。鳴呼、主王よ、我に我が罪を見、我が兄弟を議せざるを賜え、 蓋爾は世世に崇め讃めらる、アミン。

誦經) 「真の光 なるハリストス、凡 そ世に來る人を照し且 聖にする者よ、願わくは 爾 が がんばせ ひかり は我等に 輝き、我等は是に依りて近づき難き 光 を見るを得ん、願わくは なんぢ が至 淨の母と、 爾 が諸 聖 人の祈禱に因りて、我等の足を 爾 の 戒 を 行 うに むか わしめ給え、アミン。

※三時課の「來れ、我等の王・・・」に続く。